

平成29年度 秋季特別展

平城の甍Ⅱ

—奈良市所蔵瓦展—

例 言

1. この冊子は、平成 29 年 11 月 1 日～平成 29 年 12 月 28 日まで奈良市埋蔵文化財調査センターで開催する、平成 29 年度秋季特別展「平城の甍Ⅱ－奈良市所蔵瓦展－」の解説パンフレットである。
2. 掲載写真は、展示品のすべてではない。
3. 平城京から出土する軒瓦には 4 桁の数字とアルファベットからなる型式番号が設定されている。末尾に小文字のアルファベットのある瓦は、範の彫り直し段階を示す。また寺名と数字等からなる型式番号は、寺院毎で設定されている型式番号である。
4. 本書文中の敬称は略した。
5. 掲載した写真は、奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター及び佐藤右文が撮影した。
6. 本書の執筆・編集・レイアウトは、埋蔵文化財調査センター職員の協力のもとに、原田憲二郎が行った。

第1部 新収蔵資料—旧井上組所蔵瓦—

瓦葺師井上組

井上組は松太郎・亀太郎・勝の三代にわたって、文化財建造物等の瓦屋根修理に携わった瓦葺師である。

初代松太郎は、京都府木津川市山城町椿井の瓦葺職人、助八の家に生まれ、奈良市鍋屋町・南半田西町に瓦葺業井上組を興した。兄弟に秀三郎がおり、その子は『本瓦葺の技術』を著し、「瓦葺名人」と呼ばれる新太郎である。

松太郎は明治の東大寺大仏殿修理では「瓦葺師頭」として修理を行った。この他手掛けた主な修理工事を挙げれば、東大寺南大門・東大寺転害門・当麻寺金堂・興福寺東金堂・唐招提寺礼堂の修理工事がある。いずれも「瓦葺師頭」・「瓦葺工頭」・「屋根葺工頭」といった「親方」として携わっている。昭和20年(1945)、逝去。

二代目亀太郎は元興寺極楽坊禅室修理工事に「瓦葺師頭」として携わった。しかし昭和28年(1953)からの天理教おやざとやかた東棟の瓦葺工事の頃に病となり、昭和36年(1961)に63歳で逝去。

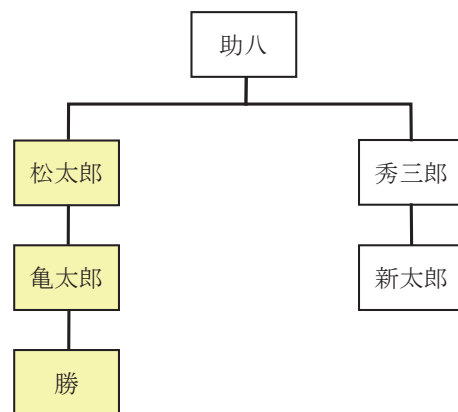
おやざとやかた東棟の瓦葺工事は、亀太郎の従兄弟にあたる新太郎の協力を得て、三代目勝が引き継ぎ完成させる。勝は東大寺大仏殿昭和大修理に携わった。時代を違えて、祖父とその孫が東大寺大仏殿の屋根を修理したことになる。平成29年、勝は95歳で逝去し、同年5月に遺族から瓦類が奈良市に寄贈された。

井上組関係略年表

1897	明治30	亀太郎誕生。
1906	明治39	松太郎、明治の東大寺大仏殿修理工事(～大正2年まで)の瓦葺師頭として修理を行う。
		新太郎誕生。
1921	大正10	勝誕生。
1927	昭和2	松太郎、東大寺南大門修理工事(～昭和4年まで)の瓦葺工頭として修理を行う。
1931	昭和6	松太郎、春日大社第55次式年御造営の功を賞される。
		松太郎、東大寺転害門修理工事(～昭和7年まで)の瓦葺工頭として修理を行う。
1935	昭和10	松太郎、当麻寺金堂修理工事における瓦葺師頭としての功を賞される。
1936	昭和11	松太郎、東大寺法華堂北門修理工事(～昭和12年まで)の瓦葺工頭として修理を行う。
1937	昭和12	松太郎、奈良市柳生の南明寺修理工事の瓦葺工頭として修理を行う。
		松太郎、東大寺大湯屋修理工事の瓦葺工頭として修理を行う。
		松太郎、興福寺東金堂修理工事(～昭和14年まで)の瓦葺工頭として修理を行う。
1939	昭和14	松太郎、唐招提寺礼堂の屋根葺工頭として修理を行う。
1945	昭和20	松太郎逝去。
1950	昭和25	亀太郎、元興寺極楽坊禅室修理工事における瓦葺師頭としての功を賞される。
1955	昭和30	亀太郎、天理教おやざとやかた東棟瓦葺を行うも、病の為、新太郎・勝が引き継ぐ。
1961	昭和36	亀太郎逝去。享年63。
1974	昭和49	新太郎執筆の『本瓦葺の技術』が発刊。
1976	昭和51	勝、奈良県瓦工事業協同組合の第1支部長として、東大寺大佛殿昭和大修理屋根葺きを行う。
1990	平成2	新太郎逝去、享年84。
2017	平成29	勝逝去、享年95。



1 昭和4年(1929) 東大寺南大門修理工事上棟式
右から2人目、松太郎



井上家系図



2 昭和6年(1931) 東大寺転害門修理工事
前列左端、松太郎



4 昭和50年代
東大寺大仏殿昭和の大修理
左は新太郎、右は勝



3 撮影時期・場所不明
前列右から3人目、亀太郎

井上組旧所蔵瓦

井上組の旧所蔵瓦は、7世紀後半から現代までの瓦で、丸瓦・平瓦・軒瓦・鬼瓦・留蓋・棟込瓦・飾り瓦等約170点ある。

来歴の不明な瓦が多いが、修理工事の際、屋根から下ろされ、点検の後、再使用ができないと判断されたものが大半とみられる。

7世紀後半の軒丸瓦は、法隆寺の瓦と伝わる。

8世紀の軒瓦のうち、東大寺式軒丸瓦（6235G）は東大寺での修理の際に下ろされた瓦であろうか。



5 7世紀後半の軒丸瓦
（法隆寺 35B）



6 8世紀の軒瓦

左側中央が東大寺式軒丸瓦（6235G）



7 閑谷学校の瓦

17世紀後半の備前焼の瓦は岡山県備前市の閑谷学校所用瓦。

六葉紋軒丸瓦は講堂所用瓦、揚羽蝶紋軒丸瓦は池田家の家紋を飾り、閑谷神社（もと儒式霊廟）所用瓦である。



8 東大寺大仏殿の瓦

「東大寺大仏殿」銘の軒瓦一組は、字体などから元禄期の東大寺大仏殿の瓦とみられる。軒丸瓦瓦当径は約28cm、軒平瓦当幅は約48cm、丸瓦は幅約26cmで長さ約52cm、平瓦は幅約46cmで長さ約52cmと世界最大の木造建築物にふさわしい巨大な瓦である。



9 近世から近代にかけての鬼瓦

井上組旧所蔵鬼瓦は26点あるが、いずれも近世から近代の製作とみられる。鬼面紋鬼瓦は寺院に葺かれていたものだろう。

中心に福槌や福袋を飾った鬼瓦は民家用で、家の富貴を願ったものである。福袋を飾った鬼瓦は、福が逃げないように、袋よりむしろそれを括る緒の方が強調されているようにも見える。



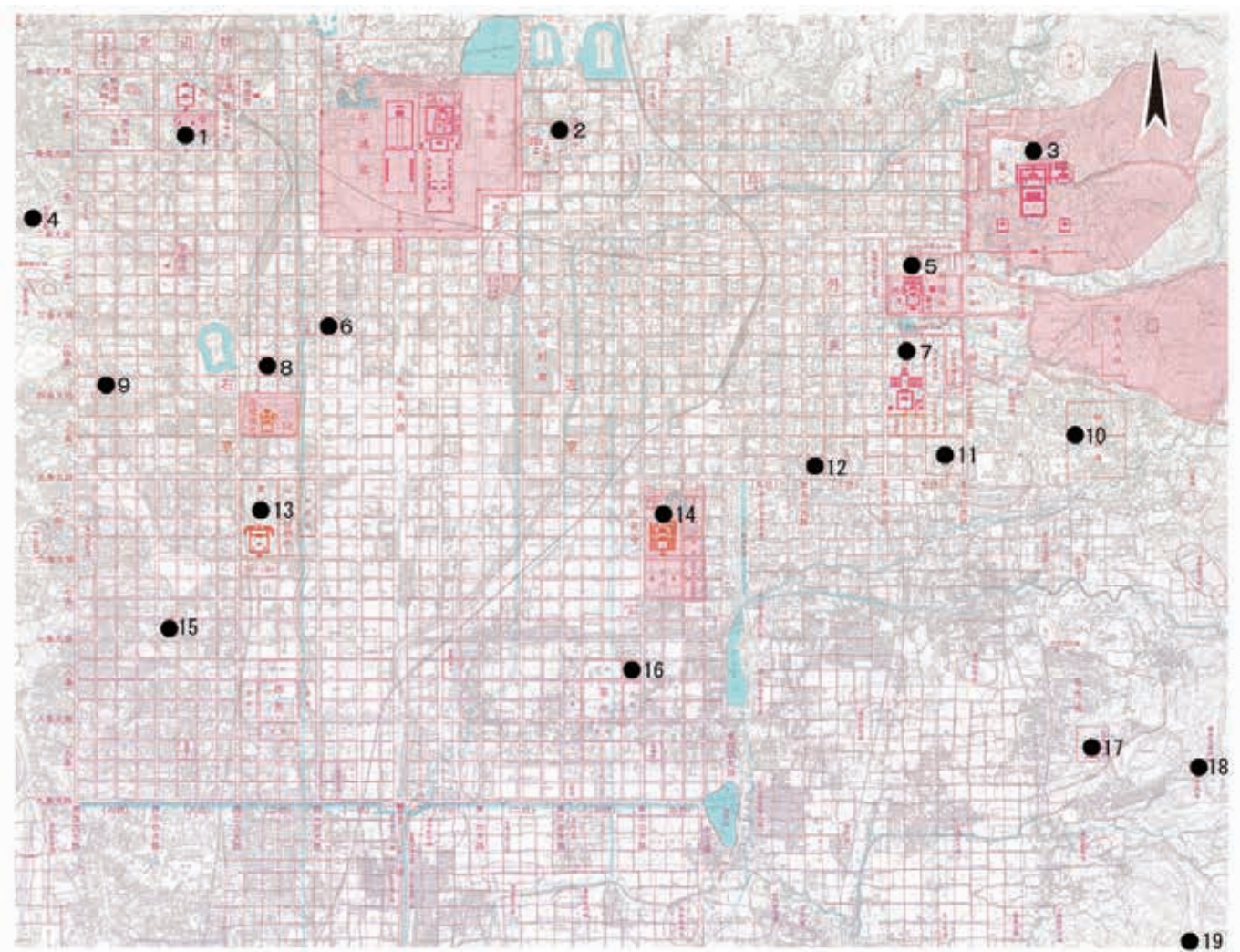
10 近代の留蓋

留蓋は切妻屋根の隅部分に置く軒丸瓦の後部を覆う為に考案された瓦である。本品は、波形の上に宝珠が造形された「立浪宝珠」と呼ばれる飾りが付く。裏面には「愛知県三河国碧海郡新川町加藤休松」の刻印がある。加藤休松銘のある瓦には、他に「大正4年」(1915)のヘラ書きのある留蓋があり、本品も近代の三州瓦とわかる。

第2部 奈良市の古代寺院の瓦

奈良市教育委員会では昭和54年度から東大寺・大安寺・元興寺等の奈良時代の官の大寺や、平松廃寺・古市廃寺といった平城京内・周辺の古代寺院の調査も実施し、その出土瓦を所蔵している。

また所蔵する瓦の中には、古代寺院の研究のためにと現地で採集され、寄贈された瓦もある。この中には発掘調査が未だ実施されていない寺院遺跡の瓦も含まれており、現段階で寺院の性格を考えるうえで、貴重な資料である。



- | | | | | | | |
|--------|--------------|---------|-----------------|---------|-------------|--------|
| 1 西大寺 | 2 海龍王寺 | 3 東大寺 | 4 菅原遺跡 (長岡院推定地) | 5 興福寺 | 6 禪院寺 (推定) | |
| 7 元興寺 | 8 濟恩寺 (推定) | 9 平松廃寺 | 10 新薬師寺 | 11 紀寺 | 12 葛木寺 (推定) | 13 薬師寺 |
| 14 大安寺 | 15 七条廃寺 (推定) | 16 姫寺廃寺 | 17 古市廃寺 | 18 横井廃寺 | 19 山村廃寺 | |

展示に関連する奈良市の古代寺院位置図

平城京の官寺の瓦

律令制下、寺を維持していく費用を官から支給され、かつ監督された寺を官寺といい、その規模から大安寺、薬師寺、元興寺、興福寺、東大寺、西大寺などは特に官大寺と呼ばれる。

これら官寺の造営にあたっては、それぞれに造寺司という寺院造営の専属組織が設置された。各寺院出土の軒瓦の紋様構成や製作技法の検討から、各造寺司の造瓦体制は独自性をもっていたことがわかってきた。

大安寺の瓦

大安寺とその創建瓦

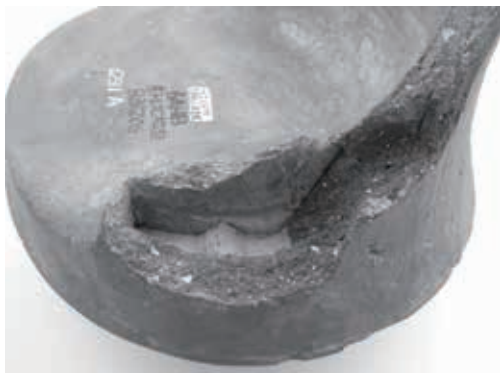
平城京左京六条四坊・七条四坊にかけて 15 町の寺地を占めた大安寺は、百濟大寺（桜井市吉備の吉備池廃寺）・高市大寺・大官大寺（明日香村小山・橿原市南浦町）を前身とする奈良時代の筆頭官寺である。創建瓦は大官大寺創建瓦である大官大寺式（6231A・B・C-6661A・B・C）と平城宮系（6304D-6664A）の2グループの軒瓦が用いられた。平城宮系軒瓦は平城遷都後に新造された瓦で、軒平瓦は宮内で使用された軒瓦と同範、軒丸瓦はよく似た瓦であることから、大安寺創建時には、宮を造営する役所（造宮省）からの範（紋様木型）の援助が想定される。ただし、軒丸瓦に接合する丸瓦の先端を歯車状に加工した後、接合する「歯車技法」は、大官大寺式・平城宮系軒丸瓦双方に確認でき、両者同系統の造瓦工人による製作とみられる。平城宮系軒瓦は、京都府綴喜郡井手町の石橋瓦窯で生産されたことが判明している。



11 大官大寺式軒瓦（6231A-6661B）



12 平城宮系軒瓦（6304D-6664A）



13 大官大寺式軒丸瓦（6231A）の「歯車接合」



14 平城宮系軒丸瓦（6304D）の「歯車接合」

大安寺式軒瓦

大安寺式軒瓦は大安寺で最も多く出土する軒瓦である。軒丸瓦は単弁蓮華紋を飾り、軒平瓦は連続した唐草紋を飾る点が特徴である。平城宮系軒瓦（6304D-6664A）を模倣して、製作されたものが最初の大安寺式軒瓦（6138E-6690A）とみられ、他に数組の大安寺式軒瓦が確認できるが、圧倒的に多く出土するものは、天平19年（747）以降製作の12弁の単弁蓮華紋を飾り、間弁が三角形を呈する軒丸瓦（6138C a）と牛頭形の中心飾りが特徴的な軒平瓦（6712A）の一組で、主に僧房の屋根に葺かれた。これら大安寺式軒平瓦は段顎であること、凸面側は縄叩きの痕跡を残さないように調整することが製作技法上の特徴として挙げられ、8世紀後半の大安寺造瓦所の特徴とみることができる。



15 大安寺式軒瓦（6138E-6690A）



16 大安寺式軒瓦（6138C a-6712A）



17 大安寺式軒瓦（6091A-6717A）



18 大安寺式軒瓦（6137A-6716C）



19 大安寺式軒平瓦（6712A）の
形態と平瓦部の調整



20 尾張国分僧寺創建瓦と同範の大安寺式軒平瓦 (6712C)

大安寺と尾張国分僧寺の同範瓦

軒平瓦 6712Cは軒平瓦 6712Aの小型品というべき瓦で、尾張国分僧寺（愛知県稲沢市）創建瓦と同範関係にあることが判明している。瓦当面に残る範型の傷み具合等から、大安寺の造瓦所から、尾張国分僧寺の造瓦所へ範が移動したとみられる。また尾張国分僧寺の軒平瓦には大安寺式軒平瓦と同様の製作技法の特徴がみられ、大安寺造瓦所の瓦工が、範を持参して尾張で技術指導にあたり、尾張の瓦工が製作したか、あるいは尾張の瓦工が大安寺造瓦所で造瓦技術を学んだ後、範を持ち帰り製作したと想定される。



21 ヘラ描き「×」のある軒丸瓦 (6138E) と軒平瓦 (6690A)

大安寺の記号瓦

大安寺の軒瓦のなかには、記号が付けられた奈良時代の軒瓦がある。

ひとつは軒丸瓦 6138Eと軒平瓦 6690Aにみられ、焼成前に記号「×」をヘラ描きしたもの。

いまひとつは、軒丸瓦 6138C aと 6091A、軒平瓦では 6712Aと 6717Aにみられ、厚さ 1mmほどの金属板を「3」の字状に曲げた用具を使って、焼成前に押捺したもの。軒丸瓦は内面に 1回だけ押捺し、軒平瓦は瓦当面の中央に 2回押捺している。

両者ともに焼成前に押されており、瓦工または瓦工の労務管理者による可能性が考えられる。また、6138E—6690A、6138C a—6712A、6091A—6717Aという組み合わせで葺くことを想定して製作されたものとみることができる。



22 刻印のある軒丸瓦 (6091A) と軒平瓦 (6717A)



23 大安寺西塔出土鬼瓦

大安寺の鬼瓦

大安寺の奈良時代の鬼瓦は、南都七大寺式鬼瓦と呼ばれるものが大半である。南都七大寺式鬼瓦はドングリ眼で、下顎・下歯を欠いた獣面を飾り、その周囲に珠紋をめぐる特徴を持つ。

南都七大寺式鬼瓦は、奈良時代中頃から出現するが、大安寺西塔出土品は紋様面上部に著しい范の傷みが確認でき、奈良時代末葉以降の製作とみられる。



24 三彩垂木先瓦

大安寺の三彩垂木先瓦

垂木は屋根板を支えるため、棟から軒に斜めに渡した建築部材で、軒先側先端に飾られた瓦が垂木先瓦である。大安寺では緑釉と透明釉を施した円形のもの、緑釉と褐釉を施した方形の2種が出土しており、軒を支える垂木が上下二段からなる二軒（ふたのき）とよばれる建築構造の建物があったことがうかがえる。



25 大安寺講堂の隅木蓋瓦

大安寺の隅木蓋瓦

隅木は寄棟・入母屋造等の屋根と屋根が交わる頂点に、斜めに渡した建築部材で、その先端が屋根の外側に出るため、ここを風蝕等から守るために隅木先端上面に被せる瓦が隅木蓋瓦である。大安寺講堂基壇北西隅付近から出土した隅木蓋瓦は復元幅が57 cmを超え、これまでみつかった中で最大の隅木蓋瓦で、大安寺講堂の巨大さを物語る。

薬師寺の瓦

平城京の薬師寺（平城薬師寺）は造薬師寺司が設けられた養老3年（719）に造営が開始された。これが天武9年（680）に藤原京に造営された薬師寺（本薬師寺、橿原市城殿町）が、右京六条二坊に移建されたことを示すものか、あるいは平城京で新造されたものか、長年論争されてきた。しかし近年の瓦の研究成果から、本薬師寺西塔造営が平城薬師寺造営と併行していることから、平城薬師寺は新造であるとされる。

平城薬師寺と本薬師寺には同範の瓦が多数あり、両寺院の造瓦体制が同一であったとみられる。そのため平城薬師寺創建軒瓦は7世紀末頃の紋様構成の瓦が大半を占め、6276A-6641Hもその一組である。内区に偏行唐草紋を飾る軒平瓦は藤原宮期の流行である。小型の軒瓦一組（6276E-6641I）は裳階用である。



26 平城薬師寺の軒瓦（6276A-6641H）

27 平城薬師寺の裳階用軒瓦（6276E-6641I）

興福寺の瓦

興福寺の前身は厩坂寺で、平城遷都に伴い、左京三条七坊の地に移建されたとされる。創建瓦は、ほぼ一組に限られる。軒丸瓦（6301A）は複弁8弁蓮華紋を飾り、大きな中房の中に蓮子を2重にめぐらす。瓦当裏面には布目痕が残り、範に粘土を詰める際、瓦当裏面に布をあてた上に板を置き、押さえつけて瓦当を成形する布目押圧技法による製作とわかる。軒平瓦（6671A）は3回反転均整唐草紋を内区に飾り、上外区・脇区は楕円珠紋を、下外区には線鋸歯紋をめぐらす。この一組は興福寺式軒瓦と呼ばれ、梅谷瓦窯（京都府木津川市）で生産されたことが判明している。



28 興福寺の軒瓦（6301A-6671A）

29 軒丸瓦 6301Aの瓦当裏面

元興寺の瓦

元興寺は平城遷都にともなって、養老2年（718）左京四条七坊・五条七坊の地に、飛鳥寺の法燈を分置・新造した寺院である。史料を裏付けるように元興寺では、百済渡来の瓦博士が指導した日本最初の瓦のひとつ、6世紀末の無子葉単弁10弁蓮華紋軒丸瓦（飛鳥寺I型式）が出土している。元興寺創建瓦は、軒丸瓦・軒平瓦ともほぼ1種類に限られ、軒丸瓦は素紋縁の複弁8弁蓮華紋軒丸瓦（6201A）と、軒平瓦は大官大寺では出土しない大官大寺式軒平瓦（6661D）である。なお元興寺極楽坊では、今も無段式丸瓦が葺かれ、飛鳥時代の瓦が使用されているとされる。ただし元興寺の創建軒丸瓦6201Aに接合される丸瓦も無段式である。奈良時代になっても無段式丸瓦を製作するのが、元興寺創建期の造瓦所の特徴かもしれない。

8世紀後半には、東大寺式軒瓦（6235O・P-6732U）が使用される。ただし元興寺以外で同範品の出土は聞かない。軒丸瓦はキザミ目を付けた丸瓦を瓦当部に接合し、軒平瓦は粘土板を素材とし、凸面に縄叩き目を残す。製作技法も東大寺で出土する東大寺式（東大寺系東大寺式）とは異なり、元興寺系東大寺式と呼ぶべきものである。



30 元興寺出土飛鳥寺創建瓦
（飛鳥寺I型式軒丸瓦）



31 元興寺の創建瓦（6201A—6661D）



32 元興寺創建軒丸瓦
（6201A）の丸瓦部



33 元興寺の東大寺式軒瓦（6235P-6732U）



34 元興寺の東大寺式軒瓦（6235O）側面にみられる
範端痕・枷型（木杵）痕

東大寺の瓦

東大寺と大仏殿造営時の瓦

東大寺大仏は天平 17 年（745）に春日山西麓に造られ始め、天平勝宝元年（749）に大仏の鑄造が終了した頃から、大仏殿の造営が開始されたとみられる。天平勝宝 4 年（752）に大仏開眼供養が行われており、この時大仏殿も完成したとされる。この大仏殿造営時の瓦は、弁と間弁が立体的な複弁 8 弁蓮華紋を飾り、外区には珠紋を飾る軒丸瓦（6235 型式）と、内区に三葉形を中心葉で囲み、その上に対葉花文を配した宝相華紋の中心飾りをもつ 3 回反転均整唐草紋を飾る軒平瓦（6732 型式）で、東大寺式軒瓦と呼ばれるものである。製作技法にも特徴があり、軒丸瓦は丸瓦先端の凹面側を切り落とし、片刃状にして瓦当と接合する。軒平瓦は基本的に凹面に糸切痕が無く、凹面側から狭端面、さらには凸面側に連続する布目を残すことから、布が敷かれた台の上に、粘土塊を置いてのぼし、台に敷いた布を凸面側に折り返し、その上から掌で加圧・成形した凸面押圧技法によるものである。



35 東大寺式軒丸瓦（左から 6235 E・6235 F・6235 D）



36 東大寺式軒平瓦（上から 6732 G・6732 H・6732 D）

37 東大寺式軒平瓦の平瓦部狭端面と凸面に残る布目痕と凸面に残る押圧痕（凸面押圧技法）

東大寺造営に際して、他寺から供給された瓦

史料によれば、天平勝宝8歳（756）に造東大寺司が興福寺に対して、3万枚の瓦の製作を依頼している。また、翌年には造東大寺司が摂津職を通じて、四天王寺（大阪市天王寺区）・梶原寺（大阪府高槻市）に瓦の製作を依頼している。これらは天平勝宝8歳に崩ぜられた聖武太上天皇の一周忌までに、大仏殿回廊の完成を急いだためと解されている。大仏殿北面回廊付近の調査では、大安寺以外であまり出土例が無い大安寺式軒瓦が出土している。このことから、史料にはみえないが、大安寺への瓦の発注もあったことがうかがえる。



38 東大寺出土大安寺式軒平瓦（6712A）

東大寺出土の恭仁宮式文字瓦

東大寺法華堂に葺かれていた瓦や、食堂の北側の大炊殿出土瓦には、人名印を押捺した恭仁宮式文字瓦と呼ばれる瓦がある。恭仁宮式文字瓦は天平12年（740）頃に恭仁宮（京都府木津川市）造営を契機に生産された瓦とみられ、大仏殿造営以前となる。史料から東大寺の地には、その創建以前から古代寺院が成立していたと指摘されており、これらの瓦がその事を示すものともみられる。



39 東大寺出土恭仁宮式文字瓦（部分）
（左）「六人」（右）「真依」

西大寺の瓦

西大寺は天平宝字8年（764）創建で、まず四王堂が造られるが、最初は檜皮葺きであり、主要伽藍の本格的な造営は天平神護3年（767）の造西大寺司任命以降とされる。西大寺の軒平瓦は中心飾りに宝相華紋をおく東大寺式であるが、中心飾りの三葉形基部が接続する点等が異なり、西大寺系東大寺式と呼ばれる。東大寺系東大寺式軒平瓦に特徴的な凸面押圧技法で製作されており、造東大寺司造瓦所の影響がうかがえる。

西大寺では三彩垂木先瓦や、花形隅木蓋瓦、火焰形とみられる瓦製品が出土している。『西大寺資財流記帳』の記述から、西大寺の堂塔の意匠はすこぶる華美で、かつ、奇抜、特異なものにするよう計画されたことが強く感じられるとの評があり、これらの瓦からも創建当時の華美な西大寺の伽藍を偲ぶことができる。



40 西大寺の軒瓦（左：6236A—6732K・中央：6200A・右：6139A—6732Q）



41 花形隅木蓋瓦



42 不明瓦製品



43 西大寺系東大寺式軒平瓦凸面の布目と押圧痕
(凸面押圧技法、下が瓦当面)

新薬師寺の瓦

新薬師寺は天平 19 年（747）、光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を願って、春日山西麓に創建された。

金堂創建瓦は興福寺ではみつからない興福寺式軒瓦（6301 I - 6671 L）である。

天平宝字年間（757～764）が堂舎の整備充実期とみられ、この時期には東大寺と同範で、製作技法も同じ東大寺系東大寺式軒瓦が使用されており、東大寺からの援助を示すものとみられる。

宝亀 11 年（780）の被災後の伽藍補修期には、西大寺と同範で、製作技法も同じ軒瓦（6236 A - 6732 Q）が使用されており、西大寺からの援助とみられる。

S Y M 01 と型式設定される軒丸瓦は、新薬師寺以外ではみつからない。8 弁の蓮華紋は複弁であるが、子葉が 3 つあるようにみえる表現は珍しい。伽藍補修期の瓦とされる。



44 新薬師寺伽藍補修期の軒丸瓦（S Y M 01）

平城京の中小規模寺院の瓦

『続日本紀』によれば養老4年（720）段階で、平城京内には48の寺があったという。その実数については疑問もあるが、奈良時代の間在京内には官寺だけでなく氏寺など多くの寺院があったことは、他の史料からもうかがえる。禅院寺や葛木寺のように藤原京から移建された寺、あるいは海龍王寺前身寺院のように平城遷都以前からその地に存在した寺院もあった。

海龍王寺前身寺院の瓦

海龍王寺は法華寺の東北隅に位置し、光明皇后が造営したと伝えるが、周辺では7世紀代の瓦が出土すること、寺地が平城京の条坊制にあわず、東二坊大路が寺の南で鍵の手に折れることから、当地には平城遷都以前に寺院が存在したと考えられている。この寺院を海龍王寺前身寺院と呼んでいる。

7世紀前半とみられる無子葉単弁10弁蓮華紋軒丸瓦、7世紀後半の複弁6弁蓮華紋軒丸瓦は姫寺廃寺に同範瓦がある。また、7世紀後半の重弧紋軒平瓦については、平瓦の広端部凸面側に、顎部用粘土を貼り付けて製作するが、接合時に顎下面数箇所を円形貫通孔を設け、そこに粘土釘を差し込んで接合する。その効果の程は不明だが、顎部粘土を強固に接合することを意図したものであろう。この特異な製作法をもつ重弧紋軒平瓦も姫寺廃寺で出土している。このように瓦をみる限り、両寺院には強い関係性が想定される。



45 海龍王寺前身寺院の瓦（左京一条三坊四・五坪出土）
前後の軒丸瓦のうち、前方が7世紀後半の姫寺廃寺同範瓦
右側赤褐色の軒平瓦の破面に粘土釘痕がみえる

姫寺廢寺の瓦

姫寺廢寺は東九条町に所在する。昭和50年(1975)の調査で講堂・僧房が確認され、寺地は平城京左京八条三坊十五坪の1町とみられるが、7世紀代の瓦も出土し、平城京条坊設定後に移建されたものか、元から存在した寺が条坊内に取り込まれたのか説が分かれる。

7世紀前半の無子葉単弁10弁蓮華紋軒丸瓦、7世紀後半の複弁6弁蓮華紋軒丸瓦は海龍王寺前身寺院の瓦と同範である。

8世紀の出土軒瓦のうち、外区の線鋸齒紋が特徴的な軒瓦一組(6127A-6659A)は、横井廢寺・平松廢寺・七条廢寺など平城遷都時に移建された寺院も含む7世紀代創建寺院に同範瓦がある。



46 姫寺廢寺の7世紀代の軒丸瓦(東市跡推定地出土)

左:7世紀前半 右:7世紀後半



47 姫寺廢寺の8世紀の軒瓦(東市跡推定地出土)

葛木寺の瓦

葛木寺は史料では天平勝宝8歳(756)6月に寺名が初見され、宝龜11年(780)には雷で金堂・塔などが焼失したとわかる。寺地は平城京左京五条六坊四坪、もしくは五坪の一町を占めたとされる。

四坪の西側隣接地、左京五条五坊十三坪の調査地(西木辻町)では、多量の瓦類が出土した。その中には大型の隅木蓋瓦があり、付近に大規模な瓦葺建物の存在が想定できる。8世紀後半の主要軒瓦は、無子葉単弁8弁蓮華紋軒丸瓦と4回反転均整唐草紋軒平瓦の組み合わせ(6091A-6717A・B)である。軒丸瓦は大安寺に同範品があるが、大安寺よりも範の傷が進行しており、大安寺より後出する。

また7世紀後半の軒丸瓦と軒平瓦が出土しており、これらは実物照合の結果、軒平瓦は藤原京の和田廢寺(橿原市和田町)と同範(和田廢寺Ⅲ型式軒平瓦)で、軒丸瓦も同範の可能性が高い(和田廢寺XXI型式軒丸瓦)ことが判明した。なお、8世紀後半の3回反転均整唐草紋軒平瓦(6702F)も両遺跡で出土している。和田廢寺は史料にみえる葛木尼寺の有力候補であることから、平城京左京五条五坊十三坪出土の瓦類は、移建された葛木寺の瓦と考えられ、史料どおり、その遺構が調査地東側に想定される。



48 葛木寺の隅木蓋瓦(左京五条五坊十三坪出土)



49 葛木寺の軒瓦 (6091A-6717B)
(左京五条五坊十三坪出土)

50 和田麿寺と同範の軒平瓦 (右前: 和田麿寺Ⅲ・右後: 6702F) と
同範の可能性の高い軒丸瓦 (左: 和田麿寺XXI)
(左京五条五坊十三坪出土)

紀寺の瓦

紀寺は天平宝字8年(764)7月に寺名が続日本紀に初見する。紀氏の氏寺であり、明日香村小山・橿原市木之本町の紀寺(小山麿寺)が平城遷都に伴い、左京五条七坊の地へ移建されたもので、西紀寺町の璉城寺はその後身と伝える。

昭和63年(1988)の紀寺町での試掘調査では、軒丸瓦1点、軒平瓦1点が出土した。軒丸瓦(6316T)は複弁蓮華紋を飾り、外区に珠紋をめぐる。軒平瓦は小片であるが、唐草が連続し、先端部につぼみを配する点は特徴的である。軒丸瓦は飛鳥の紀寺採集品に同範とみられるものがある。また、軒丸瓦・軒平瓦ともに平城京では他に同範瓦はみつかっていないことから、これらの軒瓦は紀寺所用瓦で、飛鳥の紀寺が平城京へと移建された可能性が高まったといえる。



51 紀寺の軒瓦

禅院寺の瓦

史料では入唐し玄奘三蔵に学んだ道昭は、帰国後の天智天皇元年(661、天武11年[682]とも)に飛鳥寺の東南隅に東南禅院を創建した。これを、道昭没後の平城遷都の際に、弟子たちが和銅4年(711)に右京四条一坊に移し、飛鳥寺から独立した寺院が禅院寺とする。平成4年(1992)の飛鳥寺東南部の調査では、7世紀後半の礎石建物が検出された。一方翌平成5年(1993)に実施した平城京右京三条一坊十四坪の調査では、飛鳥寺東南部の調査地で出土した7世紀後半の軒丸瓦(飛鳥寺XVII型式軒丸瓦)の同範瓦とともに、竹状模骨丸瓦が出土した。竹状模骨丸瓦は、細い棒状の素材を簾のように紐で綴じ合わせたものを模骨として製作された無段式丸瓦である。このようなことから、飛鳥寺東南部で発見された礎石建物が東南禅院で、右京三条一坊十四坪の瓦類は、飛鳥の東南禅院から運んできたもので、史料のとおり、調査地の南側の右京四条一坊に禅院寺が存在する可能性が高まった。



52 禅院寺の軒瓦 (右京三条一坊十四坪出土)



53 竹状模骨丸瓦（右京三条一坊十四坪出土）

平松廃寺の瓦

平松廃寺は、平城京の西端に近い右京四条四坊十二坪に想定される寺院である。戦前から古瓦が採集されており、採集された瓦には7世紀後半の外縁に重圈紋を巡らせた単弁蓮華紋軒丸瓦や重弧紋軒平瓦、8世紀初め頃の外縁に唐草紋を巡らす軒丸瓦（6345A）と偏行唐草紋軒平瓦（6642D）がある。これらの瓦は、橿原市田中町の田中廃寺と同範関係にあることから、平城遷都に際し、藤原京から移ってきたのが、平松廃寺との指摘がある。平成28年（2016）の初めての寺院地内での調査では明確に寺院と判断できる基壇等の遺構はみつからなかったが、多量の瓦を包含する溝がみつき、その瓦の量から、寺院の存在が確実視できるようになった。また出土瓦の中から、新たに薬師寺と同範の軒丸瓦（6236E）がみつかったことは、平松廃寺の性格を考えるうえで貴重である。



54 平松廃寺出土軒瓦（6345A—6642D）



55 平松廃寺出土薬師寺同範瓦（6236E）

濟恩院の瓦

濟恩院は遣唐大使藤原清河が唐で没したので、延暦11年(792)に遺族などが、その家を捨入して寺としたもの伝える。寺院地は唐招提寺の北側、尼辻南町にあたり、史料では平城京右京四条二坊六坪付近が寺地とされる。江戸時代にはこの辺りを「齋音寺村」と呼んでいた。平安時代には興福寺・興福院などと藤原氏四門の氏寺と称された。発掘調査は行なわれていないが採集品があり、天神社付近で採集されたものとみられる。

採集軒瓦は軒丸瓦1点、軒平瓦2点で、いずれも奈良時代中頃の瓦である。



56 濟恩院の瓦
軒丸瓦(6143A)、軒平瓦(前:6691A、後6572J)

七条廢寺の瓦

七条一丁目に所在する天武神社の周辺では、戦前から古瓦の散布が知られ、七条廢寺と呼称される。平城京の右京七条三坊十三坪付近が寺院地と想定されている。採集された瓦のなかには、藤原京の醍醐廢寺(檀原市醍醐町)と同範とみられる7世紀後半の均整パルメット唐草紋軒平瓦があり、平城遷都前の寺院あるいは、藤原京から移建された寺院の可能性が考えられる。寺院地内での発掘調査は行なわれていないが、南の隣接地で平成5年(1993)と平成12年(2000)に行った試掘調査では、7世紀から8世紀にかけての土器とともに、8世紀の外区線鋸齒紋が特徴的な軒丸瓦(6127A)1点、軒平瓦(6659A)2点が出土している。これらの軒瓦は、七条廢寺採集品にも確認できるもので、七条廢寺からの流入品とみられる。横井廢寺や平松廢寺等、7世紀創建の寺院で同範瓦がみられる。



57 七条廢寺の瓦(右京八条三坊十六坪出土、軒丸瓦6127A・軒平瓦6659A)

平城京近郊の寺院の瓦

平城京の周辺にも寺院があった。特に山の辺の道沿いには横井廃寺・山村廃寺など奈良時代以前の7世紀創建寺院が点在することは注目される。これらの寺院の大半は発掘調査がなされていないが、古瓦は古くから採集されており、寺名すら不明の寺院の性格を解明する上で貴重である。

横井廃寺の瓦

春日山の西麓、藤原台の東北丘陵上、横井町の東方飛び地に所在する古代寺院である。発掘調査は実施されていないが、古くから古瓦が採集され、塔・金堂・講堂が西から東へ並ぶ四天王寺式伽藍配置が想定され、その北側では瓦窯がみつまっている。

最も古い軒瓦は弁が角張り弁端に珠点をおく、無子葉単弁8弁蓮華紋で、7世紀前半の瓦である。天理市石上廃寺採集品に同範瓦がある。その改範資料も姫寺廃寺で出土している。同じ頃の鴟尾も採集されており、おそらく飛鳥時代には金堂が完成していたとみられる。7世紀後半の瓦には単弁16弁蓮華紋軒丸瓦や、蕨手状の唐草を背中合わせにした中心飾りをもつ唐草紋を飾った軒平瓦がある。8世紀の軒瓦は平城京内各所で出土するものと同範で、官が維持管理に関わったものとみられる。推定金堂付近で採集された側面に幾何学紋様を飾る紋様磚は珍しい。金堂内部の須弥壇（仏像を置く壇）など、建物内部の装飾に使用された可能性が考えられる。



58 横井廃寺の7世紀前半の瓦



59 横井廃寺の7世紀後半の瓦



60 横井廃寺の8世紀の瓦



61 横井廃寺の紋様磚

山村廃寺の瓦

春日山西麓の円照寺の東側、山町にある泥池の西の谷間に山村廃寺は所在する。昭和2年（1927）の調査で、瓦積基壇の金堂とその東北に八角堂が、その東に塔跡が確認された。

創建瓦は有子葉単弁8弁蓮華紋軒丸瓦と均整パルメット唐草紋軒平瓦で7世紀末から8世紀初め頃とみられている。軒平瓦は平瓦の広端部側に刻みを入れた後、これを瓦当部用粘土で平瓦の側面まで包み込んだ、いわゆる包み込み式の製作技法で造られている。包み込み式は統一新羅の軒平瓦にみられる製作法で、山村廃寺の建立氏族や造瓦工人との関係が注目される。



62 山村廃寺の軒丸瓦

古市廃寺の瓦

春日山西麓、古市町の平尾池の西側に所在する寺院で、周辺に勢力をもっていた和邇氏系氏族である小野氏の氏寺とみられている。昭和35年（1960）に調査され、南北一直線に南大門・中門・塔・金堂・講堂がならぶいわゆる四天王寺式伽藍配置とされる。横井廃寺と同範の7世紀前半の瓦の出土が知られ、従前は飛鳥時代創建寺院とされてきたが、この瓦の出所が横井廃寺であったことが判明し、平成元年（1989）の回廊推定地の発掘調査では、奈良時代の瓦しか出土しなかったことから、奈良時代の寺院とみてよい。

出土点数から8世紀前半の創建瓦の組み合わせ（6304G-6668B）と、後半の組み合わせ（6141B・宝相華紋軒丸瓦-6768A）の二組が想定される。創建瓦の組み合わせは、同範瓦ではないが、同型式の瓦の組み合わせが平城宮・大安寺・薬師寺にあることから、造宮氏族と造宮省との関係の深さが指摘されている。宝相華紋軒丸瓦は中国で考案された想像上の植物紋様である宝相華紋を輪のように配置した軒丸瓦で、我が国で他に例が無い珍しい瓦である。



63 古市廃寺の宝相華紋軒丸瓦



64 創建瓦の組み合わせ（6304G-6668B）



65 8世紀後半の組み合わせ（6141B-6768A）

古市廃寺の紀伊国分僧寺・淡路国分僧寺との同範瓦

古市廃寺では興福寺式軒平瓦の紋様構成であるが、興福寺では出土しない軒平瓦（6671M）が出土している。実物照合による観察から、この瓦は紀伊国分僧寺（和歌山県紀の川市）創建瓦および、淡路国分僧寺（兵庫県南あわじ市）創建瓦と同範であることが判明した。また瓦当面の範傷の進行具合や、範の彫り直しの状況の観察と製作技法の検討から、古市廃寺、紀伊国分僧寺、淡路国分僧寺の順に範が移動し、それぞれの国で生産されものと判明した。このように範が、3つの国を移動するのは珍しく、その背景には国を超えた、中央の意思が働いているのかもしれない。



66 紀伊・淡路国分僧寺創建瓦と同範の軒平瓦（6671M）

菅原遺跡（長岡院推定地）の瓦

菅原遺跡は平城京の西四坊大路の西方約400mの丘陵東斜面に位置し、昭和56年（1981）の発掘調査で東向きの基壇建物1棟が見つかった。建物は後世の削平が著しいが、南北22m、東西18mに復元される。出土瓦から8世紀中頃に創建されたとされる。特徴的なのは通常の大サイズの瓦とともに、多量の小型瓦が出土していることで、サイズの異なる瓦を葺いた特異な屋根であったとみられる。行基創立の四十九院のひとつ、長岡院に推定されている。

平成4年（1992）に実施した平城京右京三条三坊八坪の調査では、室町時代の瓦積み井戸を検出したが、その構築部材として、菅原遺跡の小型瓦が転用されていた。西へ1.3km離れた菅原遺跡から運ばれたものとみられる。



67 菅原遺跡の小型瓦（右京三条三坊八坪出土）

展示目録

新収蔵資料－旧井上組所蔵瓦－

写真番号	種類	採集地	調査回数	所在地	年代	点数
5	軒丸瓦(法隆寺35B)	法隆寺か	採集品	－	7世紀後半	1
6	軒瓦	不明	採集品	－	8世紀	5
7	閑谷学校の瓦	閑谷学校	採集品	岡山県備前市	17世紀後半	5
8	東大寺大仏殿の瓦	東大寺大仏殿	採集品	雑司町	17～18世紀	4
9	近世から近代にかけての鬼瓦	不明	採集品	－	17～20世紀	7
10	近代の留蓋	不明	採集品	－	20世紀	1

奈良市の古代寺院の瓦

大安寺の瓦

写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
11	大官大寺式軒丸瓦(6231A)	北東中房	DA 63	大安寺一丁目	7世紀末	1
	大官大寺式軒平瓦(6661B)	伽藍北方	DA 68	大安寺二丁目	7世紀末	1
12	平城宮系軒丸瓦(6304D)	伽藍北方	DA 6	大安寺四丁目	8世紀前半	1
	平城宮系軒平瓦(6664A)	杉山瓦窯	DA 58	大安寺四丁目	8世紀前半	1
13	大官大寺式軒丸瓦(6231A)	左京六条三坊十三坪	HJ 56	大安寺二丁目	7世紀末	1
14	平城宮系軒丸瓦(6304D)	杉山瓦窯	DA 58	大安寺四丁目	8世紀前半	1
15	大安寺式軒丸瓦(6138E)	賤院・苑院推定地	DA 43	大安寺一丁目	8世紀	1
	大安寺式軒平瓦(6690A)	杉山瓦窯	DA 65	大安寺四丁目	8世紀	1
16	大安寺式軒丸瓦(6138C a)	北東・北西中房	DA 73	大安寺二丁目	8世紀後半	1
	大安寺式軒平瓦(6712A)	北東・北西中房	DA 73	大安寺二丁目	8世紀後半	1
17	大安寺式軒丸瓦(6091A)	西面太房	DA 28	大安寺二丁目	8世紀後半	1
	大安寺式軒平瓦(6717A)	北西中房	DA 10	大安寺二丁目	8世紀後半	1
18	大安寺式軒丸瓦(6137A)	杉山瓦窯	DA 53	大安寺一丁目	8世紀後半	1
	大安寺式軒平瓦(6716C)	西面太房	DA 30	大安寺二丁目	8世紀後半	1
19	大安寺式軒平瓦(6712A)	杉山瓦窯	DA 58	大安寺四丁目	8世紀後半	1
20	大安寺式軒平瓦(6712C)	杉山瓦窯	DA 53	大安寺一丁目	8世紀後半	1
21	大安寺式軒丸瓦(6138E)	西面中房	DA 90	大安寺二丁目	8世紀	1
	大安寺式軒平瓦(6690A)	杉山瓦窯	DA 53	大安寺一丁目	8世紀	1
22	大安寺式軒丸瓦(6091A)	西面太房	DA 28	大安寺二丁目	8世紀後半	1
	大安寺式軒平瓦(6717A)	西面太房	DA 60	大安寺二丁目	8世紀後半	2
23	鬼瓦(南都七大寺式)	西塔	DA100	東九条町	8～9世紀	1
24	三彩垂木先瓦	金堂北側	DA 68	大安寺二丁目	8世紀	6
25	隅木蓋瓦	講堂	DA137	大安寺二丁目	8世紀	2

薬師寺の瓦

写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
26	軒丸瓦(6276A)	僧綱所推定地	YS 2	西ノ京町	7～8世紀	1
	軒平瓦(6641H)	僧綱所推定地	YS 2	西ノ京町	7～8世紀	1
27	軒丸瓦(6276E)	僧綱所推定地	YS 2	西ノ京町	7～8世紀	1
	軒平瓦(6641I)	伽藍北方	YS 6	西ノ京町	7～8世紀	1

興福寺の瓦

写真番号	種類	出土・採集地	調査回数	所在地	年代	点数
28	軒丸瓦(6301A)	興福寺	採集品	－	8世紀前半	1
	軒平瓦(6671A)	南花園院推定地	KF 1次	高畑菩提町	8世紀前半	1
29	軒丸瓦(6301A)	興福寺	採集品	－	8世紀前半	1

元興寺の瓦

写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
30	軒丸瓦(飛鳥寺I型式)	修理所推定地	GG7	東寺林町	6世紀末	1

31	元興寺創建軒丸瓦(6201A)	修理所推定地	G G 7	東寺林町	8世紀前半	1
	元興寺創建軒平瓦(6661D)	鐘楼・小子房	G G 75	中新屋町	8世紀前半	1
32	元興寺創建軒丸瓦(6201A)	修理所推定地	G G 7	東寺林町	8世紀前半	1
33	元興寺の東大寺式軒丸瓦(6235P)	西南行太房	G G 38	中新屋町・脇戸町	8世紀後半	1
	元興寺の東大寺式軒平瓦(6732U)	修理所推定地	G G 7	東寺林町	8世紀後半	1
34	元興寺の東大寺式軒丸瓦(6235O)	修理所推定地	G G 7	東寺林町	8世紀前半	1

東大寺の瓦

写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
35	東大寺式軒丸瓦(6235E)	北面回廊北側	T D 13	雑司町	8世紀後半	1
	東大寺式軒丸瓦(6235F)	大炊殿西側	T D 14	雑司町	8世紀後半	1
	東大寺式軒丸瓦(6235D)	北面回廊北側	T D 13	雑司町	8世紀後半	1
36	東大寺式軒平瓦(6732G)	左京二条七坊十四坪	H J 126	北半田東町	8世紀後半	1
	東大寺式軒平瓦(6732H)	左京二条七坊十四坪	H J 126	北半田東町	8世紀後半	1
	東大寺式軒平瓦(6732D)	左京二条七坊十四坪	H J 31	押上町	8世紀後半	1
37	凸面押圧技法で製作された軒平瓦	北面回廊北側	T D 13	雑司町	8世紀後半	1
38	東大寺出土大安寺式軒平瓦(6712A)	北面回廊北側	T D 13	雑司町	8世紀後半	1
39	東大寺出土恭仁宮式文字瓦「六人」	大炊殿西側	T D 14	雑司町	8世紀前半	1
	東大寺出土恭仁宮式文字瓦「真依」	大炊殿西側	T D 14	雑司町	8世紀前半	1

西大寺の瓦

写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
40	軒丸瓦(6236A)	西大寺寺地	S D 36	西大寺南町	8世紀後半	1
	軒丸瓦(6200A)	西南隅院推定地	S D 3	西大寺芝町	8世紀後半	1
	軒丸瓦(6139A)	十一面堂院・西南隅院推定地	S D 25	西大寺新田町	8世紀後半	1
	軒平瓦(6732K)	薬師金堂南西側	S D 29	西大寺小坊町	8世紀後半	1
	軒平瓦(6732Q)	政所院・正倉院	S D 31	西大寺新田町	8世紀後半	1
41	花形隅木蓋瓦	西大寺寺地	S D 20	西大寺南町	8世紀後半	1
42	不明瓦製品	西大寺寺地	S D 33	西大寺南町	8世紀後半	1
43	凸面押圧技法で製作された軒平瓦	食堂院	S D 15	西大寺本町	8世紀後半	1

新薬師寺の瓦

写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
44	伽藍補修期の軒丸瓦(SYM01)	寺院地北辺	S Y 8	高畑町	8世紀末	1

海龍王寺前身寺院の瓦

写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
45	軒丸瓦・軒平瓦	左京一条三坊四・五坪	H J 520	法華寺町	7世紀後半	6

姫寺廃寺の瓦

写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
46	軒丸瓦	東市跡推定地	T I 4	東九条町	7世紀前半	1
	軒丸瓦	東市跡推定地	T I 4	東九条町	7世紀後半	1
47	軒丸瓦(6127A)	東市跡推定地	T I 4	東九条町	8世紀	1
	軒平瓦(6659A)	東市跡推定地	T I 4	東九条町	8世紀	1

葛木寺の瓦

写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
48	隅木蓋瓦	左京五条五坊十三坪	H J 274	西木辻町	8世紀	3
49	軒丸瓦(6091A)	左京五条五坊十三坪	H J 274	西木辻町	8世紀後半	1
	軒平瓦(6717B)	左京五条五坊十三坪	H J 274	西木辻町	8世紀後半	1
50	和田廃寺と同範の軒平瓦	左京五条五坊十三坪	H J 274	西木辻町	7世紀後半	1
	和田廃寺と同範の軒平瓦(6702F)	左京五条五坊十三坪	H J 274	西木辻町	8世紀後半	1
	和田廃寺と同範の可能性の高い軒丸瓦	左京五条五坊十三坪	H J 274	西木辻町	7世紀後半	2

紀寺の瓦						
写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
51	軒丸瓦 (6316T)	紀寺	1988年試掘	紀寺町	8世紀	1
	軒平瓦	紀寺	1988年試掘	紀寺町	8世紀	1
禅院寺の瓦						
写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
52	軒丸瓦(飛鳥寺XⅦ型式)	右京三条一坊十四坪	H J 291	三条大路五丁目	7世紀後半	1
	軒平瓦	右京三条一坊十四坪	H J 291	三条大路五丁目	7世紀後半	1
53	竹状模骨丸瓦	右京三条一坊十四坪	H J 291	三条大路五丁目	7世紀後半	5
平松廃寺の瓦						
写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
54	軒丸瓦 (6345A)	平松廃寺	H J 708	平松五丁目	8世紀	1
	軒平瓦 (6642D)	平松廃寺	H J 708	平松五丁目	8世紀	1
55	薬師寺と同範の軒丸瓦 (6236E)	平松廃寺	H J 708	平松五丁目	8世紀	1
済恩院の瓦						
写真番号	種類	採集地	調査回数	所在地	年代	点数
56	軒丸瓦 (6143A)	-	採集品	-	8世紀前半	1
	軒平瓦 (6572J)	-	採集品	-	8世紀前半	1
	軒平瓦 (6691A)	-	採集品	-	8世紀前半	1
七条廃寺の瓦						
写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
57	軒丸瓦 (6127A)	右京八条三坊十六坪	2000年試掘	七条一丁目	8世紀	1
	軒平瓦 (6659A)	右京八条三坊十六坪	2000年試掘	七条一丁目	8世紀	2
横井廃寺の瓦						
写真番号	種類	採集地	調査回数	所在地	年代	点数
58	軒丸瓦	横井廃寺	-	横井町	7世紀前半	4
59	軒丸瓦	横井廃寺	-	横井町	7世紀後半	2
	軒平瓦	横井廃寺	-	横井町	7世紀後半	3
60	軒平瓦	横井廃寺	-	横井町	8世紀	4
61	紋様埴	横井廃寺	-	横井町	7世紀	2
山村廃寺の瓦						
写真番号	種類	採集地	調査回数	所在地	年代	点数
62	軒丸瓦	山村廃寺	-	山町	7~8世紀	1
古市廃寺の瓦						
写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
63	宝相華紋軒丸瓦	西面回廊推定地	F I 1	古市町	8世紀後半	1
64	軒丸瓦 (6304G)	西面回廊推定地	F I 1	古市町	8世紀前半	1
	軒平瓦 (6668B)	西面回廊推定地	F I 1	古市町	8世紀前半	1
65	軒丸瓦 (6141B)	西面回廊推定地	F I 1	古市町	8世紀後半	1
	軒平瓦 (6768A)	西面回廊推定地	F I 1	古市町	8世紀後半	1
66	軒平瓦 (6671M)	西面回廊推定地	F I 1	古市町	8世紀	1
菅原遺跡(長岡院推定地)の瓦						
写真番号	種類	出土地	調査回数	所在地	年代	点数
67	軒丸瓦	右京三条三坊八坪	H J 257	菅原東町	8世紀	2
	軒平瓦 (6681S・6765A)	右京三条三坊八坪	H J 257	菅原東町	8世紀	2
	小型丸瓦	右京三条三坊八坪	H J 257	菅原東町	8世紀	1
	超小型平瓦	右京三条三坊八坪	H J 257	菅原東町	8世紀	1



平成 29 年度秋季特別展
平城の甕Ⅱ－奈良市所蔵瓦展－

平成 29 年 10 月 23 日発行

編集 文化財課 奈良市埋蔵文化財調査センター

発行 奈良市教育委員会